勇者と私

透明な石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者と私

【Ｎコード】
Ｎ３６１２Ｐ

【作者名】
透明な石

【あらすじ】
勇者として生まれ、育てられたヴィクター。だが、彼には勇者としての力がまったくなかった。神様は何を間違えたのか、その力を私にくれた。
そんなヴィクターと私の、魔王を倒す旅。

勇者と私

勇者、勇ましい者の略だと思っていた。
それなのに、勇者という名だけが独り歩きして、誰もがその存在を敬っている。
危機が来れば、必ず勇者が立ち上がり、世界を危機から救ってくれると、
半ば本気で思っているのだ。

馬鹿らしい

私が冷めている？
まさか、そんなことはない。
私だって、他の衆と一緒になって、勇者が世界を救ってくれるなんて、信じていたい。
だが、それができないのは至極簡単な理由がある。
目の前にいるのだ、奴が。
伝説の勇者の末裔様が、伝承どおり、世界の危機とともに生まれた、その御人が。
銀色の髪をなびかせ、美しい紫色の瞳をすっと細め、片手に持った剣をきらりと輝かせ、目も当てられないほどへっぴり腰で。
「はじめ！！」
彼の剣術の師がこれ以上ないほどに、叫びあげる。室内で声が割れるほど叫ばれるのは迷惑だが、場の緊張は盛り上がった。
目の前の端正な顔立ちをした男が、一歩足を進める。間合いもなにもない。
「はぁぁー！！」

剣が私に向かって一直線に向かってくる。練習用の剣で刃がないとはいえ、あたると痛い。
痛いのはさすがにごめんなので、横によけた。
「ふっ、やるな」
伝説の勇者と呼ばれるにそん色のないその顔だちがふっと歪む。やるも何も、ただまっすぐ振り下ろされた剣を避けただけだ。多少剣をかじっているのなら、この太刀ぐらいよけられるだろう。
「次はこうはいくかな」
彼は楽しそうに、また私に向かって剣を向けてきた。今度は横になぎ払うように。さすがに永遠によけ続けるわけにもいかないだろう。私も持っていた剣で受け止める。
「ぐっ」
さすがに男の力にはかなわない。力をうまく流しながら、相手のすきを作る。左わき腹が隙だらけだ。このまま打ち込めば勝てる…が、
それができたなら最初から、打ちのめしている。
私は後ろに下がり、彼が体勢を整えるのを待つ。ふらっとよろめきながらも剣を構えなおした彼は、まだ笑う余裕があるみたいだ。
「ラル、魔術を使うのはなしだよ。さすがに、そうなるとおれも苦しい」
「わかっています」
私が距離をとったのを、魔法を使うつもりなのだと思ったのだろう。そりゃ、使いたいさ。使えば一発だもん。だいたい、剣振り回すなんて性に合わない。
わざわざ、私から剣術のみと指定した理由もわからんのか。
目線をずらせば、数十人にもわたるギャラリーがいる。その中には彼の両親も混ざっているのだ。
「ヴィク様、早く来てください」
こんな茶番さっさと終わらせたい。
私の挑発を真に受け、彼は一気に攻め込んできた。それこそ、剣を

振り回しているかのように。いや、振り回しているだけだけど。
金属のぶつかり、はじける音が場内に響く。会場のギャラリーも彼の激打に息をのむ。
「これで終わりだ、ラル！！」
え？も、もう？もう少し粘ってくれれば、場外で無難に負けられるのに。
振り下ろされた剣を受け止めてみたものはいいが、彼は動こうとしない。
場内がしんと静まる。
あぁ、もう！！
カランッ
手に握っていた剣を落とす。そして、そのまま腰をぺたりとおとした。
「こ、降参です」
両手を掲げて言えば、ギャラリーから一斉に拍手が巻き起こった。
満足そうにギャラリーに手を振っている彼を見て、ようやく安堵のため息が出る。
そんな私をよそに、彼はギャラリーの渦に巻き込まれていた。彼はその中心で、ひと組の夫婦の前で跪く。
「父上、母上。この日のために私は日々研さんしてまいりました。偉大なる家名を傷つけるつもりはございません。どうか、旅立つ息子に祝福を」
その言葉に、彼の父親は重々しくうなづき、母親は涙ぐんだ。
「ヴィクター、お主に流れるその血、そして、生まれたときより刻まれし証。お主がその宿命に従い、世界にはびこる魔を倒すのを信じている。さぁ、旅立て、我が息子よ」
そういって、腰に携えていた剣をとると、息子の前に掲げた。恭しく受け取る彼。
茶番だと思いつつも、その光景は絵本の挿絵にのっている勇者誕生の光景を思わせた。

銀色の髪、そして、手の甲に刻まれた勇者の証。
間違いなく、彼は勇者として生まれた。
それなのに、神様はすっとボケていたのだろう。肝心なものを彼に渡しそびれたようだ。
「力」を。

明日のために早めに暇をもらい領主様に挨拶し、邸を出ようと玄関に向かった。無駄にくるくると回っている階段を下りると、男女の話し声が聞こえた。
「放さないで」
か細くも、儚いつぶやきが、やけにはっきりと耳についた。
反射的に座り込んで階段の手すりの陰に隠れたが、その光景はしっかりと目に焼き付いていた。
ドレスを身にまとった女の子が
「素敵でしたわ、思わず見とれてしまいましたの」
「あぁ、クリス嬢。君にそんな言葉をもらえるなんて、努力のかいがあったよ」
努力しているところなんて見たことないけど。
「ヴィクター様、明日にはもう旅立たれてしまうんですの？わたくし、さみしくて…」
震える声ですがる女の子に、甘い声でささやく。
「必ず戻ってくるよ、君のもとへ」

「魔王を倒して」

魔王を倒すのは私だ。

神様は何を間違ったのか、
魔を祓い世界を救える力を、
彼ではなく、

私に授けた

秘密の逢瀬を邪魔するわけにもいかず、裏口から屋敷をそっと出る。
そして、すぐわきにある物置にしか見えない小屋に入る。
「かえりました」

薄暗い部屋、奥のベッドに向けて声をかける。私の声に反応して、
ベッドから初老の女性が起き上がる。
「ラルーシア、戻ったのかい？今日は早いね」
やせ細った体を無理に動かしたせいだろうか、彼女はせき込みだす。
私は、彼女の傍らにより彼女をベッドに横たわらせる。
「無理をしないで、母さん」
母が落ち着くのを見計らって、ゆっくりと語りかける。
「今日は、早めに暇をいただきました」
「あぁ、そうかい。久々にみんなでゆっくりできるね」
母のうれしそうな顔に胸が痛む。
「明日、旅立つわ。その準備のため」
「ラルーシア…」
母のこわばった顔を見ていられなかった。
「旦那様がリュドとレイスの面倒も見てくれると言ってくれたわ。
学校にも行かせてくれるって、…それに、母さんの病気のことも」
ぼろぼろの家、病気がちの母、まだ幼い弟と妹。助けてくれる親戚
などいない。
私が旅立つには十分すぎる理由だった。
「……」
母親としては、どんなに悔しいことだろうか。ベッドの傍で諭すよ
うに声をかけている娘と目を合わせようとはしない。
私はゆっくりと立ち上がり、母から離れる。それでも言葉を止めよ

うとは思わなかった。
「世界が崩壊し始めているの。北の国、ノーセリアではすでにいくつかの街がつぶされてしまったわ。もう迷っている猶予はないわ…いつまでも、私のわがままでここにいるわけにはいかないでしょ？」
もう、母に言っているわけではない。自分に納得させるために言っているんだ。
「……」
母とは何度この話で、口論になったことだろう。ノーセリアからついに人が死んだというわさが私に決意をさせた。そして、それはもう、生みの母でさえ覆せないものだった。
「旅だたないといけないのは、ヴィクター様でしょう！！なぜ、お前が、なぜ私の娘が戦いに行かなければならないの！！しるしを持っていないお前が！！なぜ、お前まで！！なぜ！！なぜ！！」
母の張り裂けそうな叫び声が今でも耳に残る。母は私から目をそらして、何もしゃべることなく、ベッドに横たわっているのに。
「今日は、特別に屋敷の料理長に頼んで食材を分けてもらったの。みんなで食べましょう」
かまどに薪をくべ、簡単な炎系の呪文を唱え、火をつける。あぁ、妹は火をつけられるだろうか、薪は十分に用意しておいたけど、肝心なことを忘れていた。
「ラルーシア」
料理に気を取られていた私は危うく聞き逃すところだった。それほど、母の声はか細く、消えそうだった。
「私の望みは、お前が帰ってくることだけだよ」
はい、そう答えればいいだけなのに。
それができなかった。

目覚めると、すでに日は昇っていた。まぶしい朝日に目を細め、ゆ

っくりと支度を始めた。
まだ眠っている妹と弟、布団をかけなおしてやると、少し笑った気がした。明るい朝日のせいだろうか母も幾分か調子がいいように見える。不安がないと言えばうそになるが、もう進むしか道はない。さよならも、すぐ帰るも、何も言わずに家を出ると、そのまま隣の屋敷に入る。入口に見張りが立っていたが、私の顔を見ると何も言わずに通してくれた。相変わらず塵一つ落ちていない屋敷を慣れた足取りで進む、そして、ひときわ大きな扉の前に立つ。ノックすべきか一瞬迷ったが、部屋に入った。
「ヴィクター様、今日ぐらいはまともに起きてください」
布団を引っぺがすと、上半身裸の男が出てきた。普通の女の子ならここで騒ぐところだが、そんなかわいい者などとうに捨ててある。
「ラル、悪いが今日は体調が悪い。先生には休むと伝えてもらえないか」
へたれた声を出して、布団を探して手を動かす情けない男に、私はそばにあった本（大人の本）をとると、男の頭を迷いなくたたいた。
「ヴィク様、それを本気でおっしゃっているのでしたら、私は本当にあなたを焼き殺さなくてはなりません。そして、領主様に、御子息はよくやったと伝えましょう」
バチバチバチ
手に持った本が焼け焦げる。半分炭になった本にさすがの彼もあせったようだ。
「悪かった。悪かったよ。ラル。着替えるからちょっと待ってくれ」
「朝から、手間をかけさせないでください。それでは外で待っています。準備が終わったら呼んでください」

「いいんですか」
何が？という風に彼は私を見返した。
「ご家族に挨拶しなくても」

こんな言葉を言う権利なんてないとは思ったが、口に出していた。
しかし、彼はおどけたように両手を広げると、
「いや～、女の子の見送り一つないなんて、俺らしくないなぁと思っただけ。ってか、ティファニーもソレイユもジェシカも、何してんだろ…」
はあぁ、と深いため息をついた彼に、心底呆れかえり、私は先に足を進めた。ティファニーもソレイユもジェシカも彼の屋敷の使用人だ。
「ラルこそいいのか」
「ええ」
良いわけない。
だが、彼にはそんなことは関係ない。彼にとっては、自分の名を世に広める物見遊山と変わりないのだから。
「じゃあ、これからよろしくな。心の友よ！！」
私の前に差し出されたこぶし。
誰が心の友だ。
「はぁ」
私はそのこぶしに自分のこぶしを突き合わせた。

そうして、始まった。
勇者と私の旅が。

勇者と私と命がけの戦い

ヴィクターとラルは魔物に襲われた。

魔物のターン
小さな魔物は体当たりをしてきた。
ヴィクターは１５のダメージを受けた。
ラルは柔らかいなと思った。

勇者のターン
ヴィクターは剣できりかかった。
魔物はよけた。
ラルはヴィクターに薬草を渡してみた。

魔物のターン
小さな魔物は不思議な舞を踊り始めた。
ヴィクターはつられて踊り始めた。
ラルはかわいいかもと思った。

勇者のターン
ヴィクターは剣できりかかった。ヴィクターの剣は岩に当った。
ヴィクターの剣に４５のダメージ。
ラルは薬草がもう切れていることに気付いた。

魔物のターン
小さな魔物は雄たけびを上げた。
ヴィクターはすくみあがった。
ラルはかわいいなと思った。

勇者のターン
ヴィクターは剣できりかかった。が、ふりあげた途端、剣は折れてしまった。
ラルは空を見上げた。もうすぐ雨が降ることに気がついた。

魔物のターン
小さな魔物は子守歌を歌った。
ヴィクターは眠ってしまった。
ラルは拍手を送った。

勇者のターン
ヴィクターは魔法を使った。草むらが燃えだした。
ラルの水筒が空になった。

・・・・・・

その日は街に戻った。
経験値を２０手に入れた。
ヴィクターはレベルが上がった。
ＨＰが４上がった
ＭＰが２上がった
力が１上がった
知名度が３上がった（ボヤ騒ぎのため）

ラルはレベルが上がった。
ＨＰが２上がった
ＭＰが３上がった
魔力が２上がった
ラルは現実逃避を覚えた

＊現実逃避：戦闘中も移動中も使用可

いやなことを忘れられる

でも、現実は変えられない

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3612p/

勇者と私

2010年12月14日20時24分発行